

葉山町立長柄小学校

研究テーマ：お互いを認め合う児童の育成～インクルーシブ教育の実践から～

1、実践の目的

研究テーマ「お互いを認め合う児童の育成」は、学校教育目標である「自分も人も大切に 思いやり チャレンジ しなやかな心」を具現化していくことにつながっていく。

学校教育目標の達成に向けては、自己肯定感を持たせることがそのスタートとなる。自己肯定感が強い児童は、他者理解も早くなる。この「自己」と「他者」の関係に軸足を置いているのが、「インクルーシブ教育」である。本校の児童には、学習やコミュニケーションでニーズ(困り感)を抱える児童がいる。一人ひとりの背景や課題も、決して一様ではない。児童が安心して、生き生きと学べる場をよりつくっていく必要がある。そのため、「インクルーシブ教育を実践していくことの効果」を、校内研究を通して明らかにしていくことを目的とした。漠然としたものを、明らかにし、学校として根拠のある自信を深めていくきっかけにしたいという思いのもとに今年度の校内研究を進めた。

2、実践の内容

「どんな研究をしたいか」というアンケートを取り、6つの少人数チームをつくった。年間計画をもとにチームごとに研究を進め、発表は授業公開を伴うものやレポート発表の形で行った。

(1)「インクルーシブ教育とは？」チーム
葉山町の特別支援教育の流れ・国際情勢と国の指針などの情報提供を行った。リソースルーム(リラックスルーム)の開設、運用の流れをつくった。

(2)「学級づくり」チーム
道徳や学級レクを通して、お互いを認め合える学級をつくることをねらいに実践報告を行った。また、教室前の空きスペースにクールダウンすることができる休憩場所をつくった。



(3)「児童情報共有システムづくり」チーム
どの教員でも児童の実態、有効だった支援方法や連携している外部機関などの情報を共有できるシステム「支援シート」をデータで作成した。実際に取り組みながら、活用の仕方についてより深めていった。

(4)サポート体制チーム
支援が必要な児童への手立てがどのようなものがあるかをアンケートにより整理した。時間や場の構造化が有効である。ICT機器を利用した手立ての紹介もあり、ロイロノートの学内先生のためのフォルダに課題が早く終わった児童に対する追加課題として利用できるサイトやアプリの紹介をした。今後も追加されていく予定である。

(5)国語科チーム
「児童の多様な表現を保障し、それを認め合う授業づくり・ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくり」をねらいに

授業改善を試みた。2学年…文章を主体的にまとめる方法の実践報告があった。4学年『ごんぎつね』…単元を貫いて「ごんTwitter」という学習方法、5学年『たずねびと』…単元のゴールと目的をいかに共有するか、「綾の心の地図作り」という学習方法の提案があった。授業の様子を通して、児童の学びの在りようを探った。

(6) 体育科チーム

『誰もが活躍できるゲームを自分たちで作れ、みんなでバスケットボールを楽しもう！』をめあてに仲間との協力や安全面に気を配り、バスケットボールの楽しさや喜びを味わうことができるようにするには、どのような手立てがあるのか実践提案がされた。ルールを工夫したり、チームの特徴に応じた作戦を立てたりして、広い視野に立って思考力を育てる工夫の一つとして「アダプテーション」という取組が共有された。

指導助言者は、葉山町発達支援システム会議会長、元鎌倉女子大准教授 伊藤大郎先生であり「インクルーシブ教育とは」「小中一貫教育におけるインクルーシブ教育の視点」「『共に学ぶ』の深化」という題で講演会をもち、教職員全体で理解を深めた。二回目の講演会は、南郷中学校の教職員との合同研修会として開き、連携を進めた。中学校の先生方と児童・生徒をどのようにみて捉えていくのかという視点や指導観の共有化へとつながる研修となった。



3、実践の成果

休憩スペースやリラックスルームを作り運用することで、児童の居場所の多様化につながっている。また、安心安全な場所や授業改善による手立てが児童の自己肯定感を高めている様子が見られた。教職員の成果としては、6つのチームをつくることで、研究を「自分事」として考えたり情報を共有したりする姿が見られた。また、低学年のうちから、多様な表現方法を認め合う授業づくり・クラスづくりの大切さ、困難さを抱える児童に、自分の好きなことやできることを見つけ、お互いのそれらを組み合わせながら活用していく資質や能力を育てる必要性を学校全体で再確認できた。

「ICT機器の活用に向けて情報共有フォルダや児童情報の共有化の支援シートをつくったが、機能しているのか…」といった授業実践や学校全体への投げかけを行うことで、また新たな課題が浮かび上がっている。それに対し、グループや学校全体で手立てや工夫を出し状況を前進させていこうとする取組が見られるのも、実践の成果と言える。



4、今後の展開

長柄小学校の新たなインクルーシブ教育がスタートしたため、支援教育の在り方を校内研究で継続して取り組んでいきたい。また、中学校との一貫教育にむけて、どのような児童生徒像を望むのか、そのための学習方法を個別最適な学びと協働的な学びの視点からも深めていきたい。